

全日本民医連 第9回医療・介護安全交流集会 概要報告

- 【日時】 2019年3月2日(土)13:00~3日(日)12:00
【場所】 東京ビッグサイト(1-2日目全体会・1日目分科会)、TFTビル(1日目分科会)
【参加人数】 45県連から387名(一般参加333名(介護事業所92施設)、全日本民医連関係者50名、外部講師4名)

＜職種内訳＞ 医師・歯科医師19名、保健師・助産師・看護師164名、薬剤師32名、管理栄養士1名、事務51名、臨床検査技師2名、放射線技師4名、臨床工学技士16名、MSW・生活相談員・社会福祉士4名、介護福祉士・介護職64名、ケアマネジャー2名、歯科衛生士2名、理学療法士・作業療法士19名、顧問弁護士3名、講師4名。

【メインテーマ】 「多職種協働で取り組む地域包括ケア時代の医療介護安全」

【獲得目標】

- ① 地域包括ケア時代において、医療職と介護職とが相互にその専門性と価値観を理解し、共有することが必要であることを認識する。
- ② 安全文化の醸成をはじめとする安全への取り組みが、総合的な医療・介護の質向上に繋がることを知り、その契機とする。
- ③ 安全文化の醸成には良質なコミュニケーションが重要であり、チームSTEPPSをはじめとしたノンテクニカルスキルの有用性を知り、その確実な普及を進める。

【問題提起】

今回の「問題提起」は、「全日本民医連の2年間の取り組み」と、「今期の重点課題」を柱に述べている。43期は新たに医療介護安全委員会と名称を変え、医療と介護で合同の委員会体制となった。医療と介護で統一的に、地域全体を視野に入れた安全への取り組みが求められる。2025年に向けて医療と介護の境界が流動化し、そこに関わる多職種は在院日数の短縮化、タスクシフティング等の業務範囲の変化が起こり、新しい安全の「隙間」にも対応を迫られている。

第1章では、全日本民医連 医療介護安全委員会の2年間の取り組みについて、第2章では、今期の重点課題の5項目について触れている。

今期の重点課題1 「地域包括ケア時代の医療介護安全」

地域の中では、複数施設において多職種が双方向でのコミュニケーションの量と質の向上が求められている。医療・介護の現場では、個人の特性と高齢者特有のリスクをできるだけ正確に把握・評価し個別的に適切な対応が必要である。医療と介護が協力して地域全体で進める安全の取り組みについては、まだまだ情報や実践が不十分であり、私たちの取り組みも含め情報を発信しつつ、地域包括ケア時代の医療介護安全に対し地域の中で中心的に取り組むを進めよう。

今期の重点課題2 「医療介護安全の新しい考え方」

●レジリエントヘルスケア

医療介護現場においてレジリエンスを高めることは医療介護安全にとって重要な課題である。医療・介護の現場においては、画一的対応だけでは安全を確保できない。医療介護安全には、人のパフォーマンスの変動を抑制することが重要と考える Safety-I(後追い型安全管理)をしっかりと行いつつ、成功事例に着目し、人々が医療介護の現場の状況に応じて、事故を未然に防ぐという安全対策の考え方である Safety-II(先行型安全管理)についても学び実践することが必要である。

●心理的安全性

心理的安全性の高いチームは、安全においても高いパフォーマンスを発揮すると言われている。心理的安全性を高める要素は、職能に対する相互理解や発言機会の均等と共感力(社会的受容性)だとされている。これらは権威勾配の緩やかな職場作りと組織

運営に共通している。

今期の重点課題3 『危機管理』とともに『リスクマネジメント』も～介護分野での安全の取り組みの前進のために～

「特養あずみの里」裁判を契機として、介護分野で危機管理への取り組みが急速に進行し、「介護現場における重大事故に対応した危機管理の基本指針 2018」の学習と普及が進んでいる。介護におけるリスクマネジメントは「より質の高いサービス提供することによって多くの事故が未然に回避できる」という考え方で取り組みを進めることが重要。

地域のニーズの増大と介護保険制度の普及で、民医連においても近年介護事業所やそこで働く職員は急速に増加している。あらためて全ての職場で安全文化を醸成させる取り組みが求められている。

今期の重点課題4 「安全を組織文化に『チーム STEPPS』の推進とトップ管理者の役割」

権威勾配を軽減しコミュニケーションを改善することは、チーム(組織)の文化を変えていくことである。組織全体が「良い組織文化」の醸成を進める中でしか安全文化の醸成は実現できない。チーム STEPPS(チームトレーニング)は、全体のパフォーマンスを向上させるとともに、医療・介護の質向上とチーム(職場)の文化・風土を大きく向上させることができるツールである。業務を進める上での基本的なスタンスを具現化したものとして位置づける必要がある。その先頭にトップ管理者が立つ必要がある。

今期の重点課題5 「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)、インフォームド・コンセント(IC)とリスクマネジメント」

ACP や IC の本来の目的は、患者/利用者の自己決定権の尊重と同時に、患者/利用者とその家族、医療介護従事者との共同の営みとして医療介護を実践することである。ACP や IC によってリスクを評価し共有することが可能となり、リスク管理の上からも重要なプロセスと位置づけられる。

おわりに、良好なコミュニケーションや心理的安全性を通して、職員一人ひとりが学習し成長できるチーム作りと、地域の中で信頼される医療介護サービスの提供が必要であり、民医連は医療介護の複合体として、安全をはじめとする医療介護の総合的な質向上を進める先進例となりうる。安全で良質な医療介護を提供し、チームの主体的な取り組みを職員一人ひとりの誇りとしていこう。

【記念講演】 「地域包括ケア時代に多職種連携で取り組む医療介護安全-連携の基本的なスタンス」

衣川さえ子氏(東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部 教授)

【特別講演】 「看護と介護の専門性と協働-ケアの安全性を求めて」

川嶋みどり氏(一般社団法人 日本で・あて、TE・ARTE 推進協会 代表理事 / 日本赤十字看護大学 名誉教授)

【グループ討論】

6人1組のグループとなり、座長の進行のもと4つのテーマ(①川嶋みどり氏の講演の感想交流、②安全に関して、医療と介護の連携で困っていることを出し合い、出された「困りごと」の中から、「あるある」なテーマを1-2個決める、③「困りごと」の原因は何か、④「困りごと」を解決する(減らす)にはどうしたらよいか。)に添って討論を行なった。

【テーマ別分科会】

第1分科会『危険予知トレーニング(KYT)』

1. 分科会の概要

安全に対する学習の方法、危険予知トレーニング(KYT)を学んだ。

2. 主な討論点など

- ・講義とワークを交互に繰り返し、講義後すぐに実践することで、講義の意図を実感出来るように工夫した。
- ・イラストKYT:自分とは違う意見が出され、1人ではなくチームで話し合うことで気づきが多くなり危険を予防できる。
- ・チームの鎖:①条件(負荷)を加えながら3回繰り返したが、回数を重ねるうちにほとんどのグループが前回よりも鎖の個数が多くなっていた。②1つの目的に向かってリーダーシップとメンバーシップそれぞれの役割を理解し、ナンバーバルコミュニケーションを取りながら取り組むことができた。③チームの鎖で切れてしまう弱い部分は個人の責任とせず、チーム全体でフォロー・サポートしていくことが必要となる。

第2分科会『リスクマネジメントの基本』

1. 分科会の概要

「リスクマネジメントの基本と応用 ヒューマンファクターの基礎」をテーマに講演を行った。

獲得目標 ①正しく伝える、根拠を示すなどの基本・基礎の重要性を理解する。

②具体的な実践の手法や考え方を学んだ。

2. 主な討論点など

講演を受けて以下のテーマでグループディスカッションを行った。

①講義を踏まえ現状を振り返る

②明日から何をしていくか・できるかを考える。実践していく上で、現場で困っていることの共有。

第3分科会「安全文化の醸成と Good Job 報告」

1. 分科会の概要

「チーム医療に必要なこと」(チーム STEPPS 復習)をテーマに学び、チーム体制を考える演習(Web of Life)を4チームで実施。その後「多職種協働を推進していくためには」をテーマにグループで討議。次に Good Job 実践病院からの報告を受け、「安全文化醸成のためにできること宣言」をテーマにグループで討議した。

2. 主な討論点など

下記に記載する5点について討論や演習を行なった。

①医療の特性“複雑適応系”に対する新しい医療安全へのアプローチ「レジリエント・ヘルスケア」が求められていること。そのためには、ハンテクニカルスキル獲得が必要であること。

②職種間のメンタルモデルの違いを認識し、メンタルモデルの共有に尽力しなければならないこと。

③個人の能力、システム対策だけでなく、チーム力が必要不可欠なものであり、そのトレーニング・ツールとしてチーム STEPPS が効果的であること。

④患者ケアのための複数のチーム体制があり、多職種の協働を推進していく必要があること。

⑤安全文化の醸成、心理的安全性担保のための1つの手段として、成功事例から学ぶ「Good Job 報告」をうまく活用する。

3. 今後の課題

・医療と介護だけでなく、院内の他職種との連携についても取り組むべき問題、支障となっている壁(権威勾配を含め)が多数存在している。

・まずは他職種の業務内容、役割等について改めて学び直すこと。そして、そこから医療と介護の垣根を取り払う活動を計画、実践していかなければ前向きな取り組み、活動につながっていかない。

・管理者が、根気強く諦めることなく、一歩ずつでも前進していけるよう、安全文化醸成のためのリーダーシップを発揮する必要がある。また、スタッフも各々がチームを形成する一員としての自覚を持ち、職種間の違いを認識し、お互い歩み寄る姿勢で患者中心の医療、介護を目指す必要がある。

第4分科会・「警鐘事例から学ぶもの・医薬品副作用モニター」

1. 分科会の概要

集約された警鐘事例について報告された。

全日本民医連医薬品副作用モニターについて報告された。

2. 主な討論点など

医療事故を起こした場合、当事者に対して基本はきちんと隠さず話していくことが大切である。

業務が増えるがやりがいも大きく、グッドジョブとしての報告に励まされるなどの報告があった。

3. 今後の課題

地協の安全委員会では、年間 20 例あまり警鐘事例が取り上げられていることを考えると、県連や地協など身近なところで事例を検証し、そこから全日本の報告につなげるようにしていく。

第5分科会・「医療介護現場における「くすりの安全」について考えよう～基本の「き」から情報共有～

1. 分科会の概要

薬剤の基礎知識の伝達(服用方法・保管方法からハイリスク薬まで)、ポリファーマシーリスクの理解と対策、多職種間の薬に関する情報伝達と共有を目的として、「介護現場における医薬品関連事故の実態」について、「介護現場で役立つ薬の知識」について講演を行った。グループワークでは講演の感想、医薬品安全のための自施設の工夫、今後の課題・要望などについて討議した。

2. (グループワークにおける)主な討論点

- ・介護士も基礎知識が深まったという意見が多かった。
- ・薬剤師も介護現場で利用者や職員が困っていることを知る機会になり、職種間のハードルが低くなった。
- ・ポリファーマシーや、地域での実際の事例についても講演で触れていただき、薬の基礎知識だけでなく、患者・利用者の安全や生活の質のためにそれぞれの職種が、情報共有し協力する必要性を感じられた。

3. 今後の課題

- ・薬剤師には基礎的な薬の知識が中心で物足りなかった。今後は「医薬品安全管理者」の具体的業務の交流・研修も必要。
- ・看護師には新たな学びとなる内容であったが、介護施設や事業所の医薬品安全管理は、急性期病院の経験が少なければイメージそがわいてこないため「知らないうちにリスクの高いことをしている」ことになりかねない。老健でも今後医薬品管理のリスクマネジメントが問われることになるため、学べる機会があると良い。
- ・現場で実際に使える改善策まで出すには時間が不足していた。レジメと講義は伝達できる内容であった。

第6分科会「現場ニーズに寄り添った安全学習会のあり方とは？」

1. 分科会の概要

「現場のニーズに添った安全学習会のあり方とは？」をテーマにシンポジウムを行い、シンポジストより報告を行った。

2. 主な討論点など

安全に関する学習や教育の仕組みに主眼を置き企画を行った。それぞれの指定報告は他の現場でも模範事例となる報告であった。基調講演で行ったインストラクショナルデザインは、現場で行われる研修(学習会)の設計の基本を提示でき大変貴重な内容であった。履修主義に陥りやすい現状から、習得主義への転換は医療技術者の大きな課題である。

3. 今後の課題

研修(学習会)に対する考え方に、院所間で差があることが浮き彫りになった。分科会で報告されたような研修(学習会)を各院所で実践するにも個々の努力だけでは困難であり、教育プログラムのパッケージ化による共有は一つの解決策となりうる。

【ブレ企画】 「チーム STEPPS 基礎研修編」

1. 研修の概要

患者/利用者の安全にとってチームに何が必要なかを、いくつかの演習により考える。様々な職種と一緒に協働していくことが求められる医療・介護の現場において、メンタルモデルの共有や組織の心理的安全性が大切であり、チーム STEPPS の概念やツールを学び、現場での具体的実践に結び付ける。